

# 第7回 全日本社会人バスケットボール選手権大会

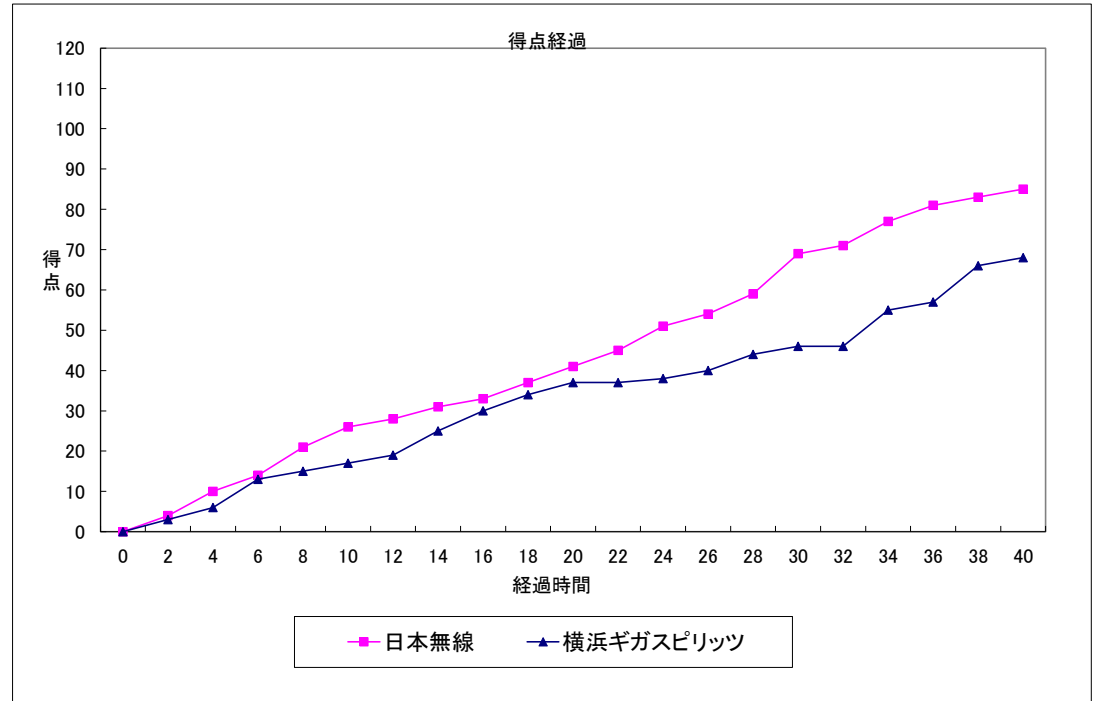
## 競技結果

実1・関東	日本無線 85 <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr><td>26</td><td>-</td><td>17</td></tr> <tr><td>15</td><td>-</td><td>20</td></tr> <tr><td>28</td><td>-</td><td>9</td></tr> <tr><td>16</td><td>-</td><td>22</td></tr> <tr><td>-</td><td>-</td><td>-</td></tr> </table>	26	-	17	15	-	20	28	-	9	16	-	22	-	-	-	ク5・神奈川	68	横浜ギガスピリッツ	期日	2011年11月6日		
26		-	17																				
15		-	20																				
28		-	9																				
16		-	22																				
-	-	-																					
					試合	M13	コート	A2															
					会場	富山県西部体育センター																	
					主審	小澤 勤																	
					副審	東 考生																	

連盟	1	2	実1・関東			連盟	13	14	ク5・神奈川		
チーム名	日本無線					チーム名	横浜ギガスピリッツ				
部長	土田隆平					部長	小山泰介				
顧問	荒 健次					顧問					
監督	赤城 浩					監督	小山泰介				
H・コーチ						H・コーチ					
コーチ	箱崎雅俊					コーチ					
A・コーチ	小野 豊					A・コーチ					
主務・副主務						主務・副主務					
マネジャー	中村千里					マネジャー	石川景子				
トレーナー	渡邊由紀					トレーナー					

選手名	背番号	得点	3P	2P	FT	PF	選手名	背番号	得点	3P	2P	FT	PF
福田大祐	1	13	2	3	1	1	斉藤 卓	0	2	0	0	2	1
福田侑介	2	18	1	6	3	1	益山遼太郎	1					
会川剛史	3	12	0	6	0	0	小泉雄平	2					
鈴木伸之	6	3	1	0	0	0	安宅寛法	3					
松林弘祐	7	0	0	0	0	1	大堀 俊	5	10	1	3	1	2
小林純也	9	7	1	2	0	2	水野健一	6	10	1	3	1	1
鈴木裕也	22	8	0	4	0	2	三浦佑太	7					
尾崎智則	25						岩本康史	9					
箱崎雅俊	26						滝沢 理	10					
小野 豊	27						石田陽輔	11					
福山慎也	28	0	0	0	0	1	長田茂雄	14					
樋渡大樹	34	10	0	5	0	1	西山達哉	18	16	4	2	0	0
山本修二	49	10	0	4	2	2	村田智史	20	2	0	1	0	2
鎌田晃輔	58	2	0	0	2	3	西谷亮一	21	7	1	2	0	1
上野 学	72	2	0	1	0	2	西 祐輔	22	15	0	6	3	1
							五十嵐真悟	24	6	0	3	0	3
							鈴木健史	77					
							安野一平	99					
合計		85	5	31	8	16	合計		68	7	20	7	11

記録:富山県バスケットボール協会



### 戦評

第1Q 横浜の#18の3ポイントより始まる。日本無線は、立ち上がりファーストシュートをことごとく落とすが、リバウンドを制し、ゴール下のシュートを重ね逆転する。横浜も#6の3ポイントや#22のポストプレーなどにより食い下がり、26対17で日本無線リードで終了する。

第2Q 横浜の#21のミドルシュートより始まる。日本無線のディフェンスのプレッシャーが徐々に効き始め、インターセプトからの速攻が決まる。日本無線のペースとなるかと思いきや、横浜の#18、#15の3ポイントなどにより1点差まで追いつくも、交代した日本無線#3の連続得点により、41対37の日本無線4点リードで折り返す。

第3Q 日本無線#49、#2の連続得点により始まる。横浜は何本ものシュートを打つものの決まらず、リバウンドをことごとく取られ得点に結びつかない。日本無線は、前半に負傷したスタートの#2がコートに戻り得点を重ね、51対38と差が広がった時点で、横浜はたまたまずタイムアウトを取る。横浜の#18、#20のドライブからのアシストにより連続得点をあげるが、終了間際に日本無線の連続3ポイントが決まり、69対46の大差となり日本無線リードで終了する。

第4Q 日本無線は大幅にメンバーを代えスタートする。序盤は互いにシュートを打つものの決まらない展開となるが、終始、高さやスピードなど総合的に勝る日本無線が危なげなく勝利する。